

ひとえに藍といっても実は様々な色と名称があり、その一つ一つに意味があり日本の文化を感じる事が出来る

- 藍白 別名「白殺し」と呼ばれ白に近いごく薄い青で、かすかに青みのある色。色味はほとんど白に近く、江戸時代に中国から伝わったと言われている。
基本色
- 水縹 深く澄んだ青緑色にたたえられた水を碧水という。一般で言えば『水色』であるが万葉集の頃には『水縹』と言われていた。
基本色
- 瓶覗き 瓶覗きの「瓶」は藍の液を貯える藍瓶のことで、「覗き」とは、被染物を藍瓶の薄くなった液に一寸浸す意味で「覗き色」とも呼ばれる。
基本色
- 水浅葱 水浅葱と瓶覗きは同じ色だと記されていることもあるが、瓶覗きよりも緑味があり、濃い色味。水の色のような浅葱色。
基本色
- 浅葱 江戸、元禄時代に流行した色で、若い葱に因んだ色であるが、その染色は実物の葱よりも青みがちの深い緑青色。若い女性や伊達男に人気の色であった。
基本色
- 薄縹 縹色は古代の藍染めの標準色で、深縹や浅縹など様々な縹色があり、これもそのひとつ。
基本色
- 薄藍 藍色の薄い色で、古来より様々な色名が残されているが色名として理解されやすいからか近年の文学ではしばしば用いられている。
基本色
- 花浅葱 花色がかかった浅葱色で、鮮やかな青色をいう。もとは露草の青い汁を用いて染めていた色を言うのだが、後に藍染の青を呼ぶようになった。
基本色
- 浅縹 「縹」が色制にあらわれるのは持統天皇四年（690）の製の深縹、浅縹からであるが、後に“深、中、次、浅”の4段階に分けられた。
基本色
- 納戸 名の由来としては「納戸の幕がこの色をしていた」「納戸を管理する役人がこの色の制服だった」「染めた藍染めの布を納戸にしまっていたから藍の色を納戸という」など様々な説がある。
基本色
- 縹 日本の代表的な色を表す伝統色名が「縹色・花田色」である。この色は藍の染料だけで染められる純粋な藍染の青とされている。
基本色
- 鉄 焼いた鉄肌のような緑味の暗い青色をいう。染色は江戸後期頃からと思われるが、その染法は当時の染物書には見当たらず、明治前期の書物に初めて見られるようになる。
基本色
- 熨斗目 「熨斗目」は本来は経生糸、緯を半練糸で縞や格子などに織り出した先染の織物の名で、これを仕立てた小袖の名称となった。熨斗目はその織物の地色に用いた花の色を言う。
基本色
- 藍-基本色 「藍色」とは藍の単一染の色ではなく、藍染の青に黄を加えた緑味の青のことで、原始染色の藍摺の色が緑味を含んでいたことからそれを指す色名であった。
基本色
- 藍錆 暗い赤味を帯びた青で、江戸時代中期、洒落本などにしばしば登場し藍色の変わり色として愛用されていた。
基本色
- 紺藍 藍の染料で染められる純粋な青の中でも濃い色目に当たる。縹よりも赤味があり、濃い色とされる。
基本色
- 藍鉄 藍色がかかった鉄色で、ごく暗い紫味の青。藍色は日本人にとって最も身近な色であったので藍色の変色も数多くある、これもその一つで最も暗い色味の部類に入る。
基本色
- 搗 紺より更に暗い色で江戸時代には「かちん色」と呼ばれていた。「かち」とは藍を濃く染み込ませるために被染物を「搗(か)つ」、即ち、搗(つ)くことからついた色名である。
基本色
- 紫紺 特別華美でもないこの紺色は昔から大衆に好まれ、この深い紺色は紺屋という職業が出来るほど親しまれて来た。その紺の中でも紫味の強いのが紫紺色である。
基本色
- 留紺 紺色よりも濃い「留紺」は紺色の中でも一番濃い色を指す。
基本色
- 搗返し 全体を深い藍で染めた色。かつては別の色に染めた上から、更に藍を染め重ねた色を言った。
基本色
- 濃紺 留紺よりも若干青味があり紺でも変色の部類といえよう。藍の色名の中でも最も暗く濃い色となる。
基本色